

## 画仙堂

画仙堂は、境内の南西の角にある放生池の近くにあり、もみじの木立の中に隠れていて、目立たない小さな建物である。このお堂は、1914年に有名な芸術家である鈴木派の2代目の鈴木松年（1848年～1918年）によって寄贈された。お堂の内部と天井には、松年の長男鈴木松僊（1872～1925）と、第二次世界大戦後に活躍した風景画家の関口雄揮（1923～2008）の作品が描かれている。鈴木派の絵画は、中国華南の画派である南画の影響を受けた「ゆるい」筆致で、すぐに識別できる。

松僊が描いた天井には、大空を飛ぶ龍を題材にした天龍図が描かれている。天龍は寺院を火災から守るといわれている。天龍図は松年が描いた天龍寺を始め、京都の多くの寺院で見ることができる。お堂内部の正面には、阿弥陀様が極楽浄土から降りられると言われている山々の絵がある。絵の右には「月のしずく」、左には「影」というタイトルの一対の絵画が並べられている。3つの作品はすべて関口（雄揮）によって描かれた。お堂は一年の大部分が閉鎖されているが、11月から12月初旬の特別寺宝展の期間中、扉は開かれる